バングラデシュ南部避難民救援事業
地域保健要員　看護師　川瀬佐知子（2018 年 7 月 10 日～8 月 28 日）

2017 年 8 月以降ミャンマー・ラカイン州より国境を越えてバングラデシュ南部に移動した避難民の数は 70 万人を超えます。以前からの避難民を合わせると 90 万人以上がバングラデシュに避難し、その多くが現在もキャンプ生活を送っています。

日本赤十字社（日赤）は昨年 9 月からクリニックでの医療支援を行っています。キャンプからのアクセスが良く、現在も 1 日平均 150 人程度の患者が訪れます。患者の多くは熱、体のだるさや痛み、下痢、皮膚疾患、急性呼吸器疾患などです。これまで病院へ行くことさえ難しかった避難民の方々にとって、クリニックでの診療支援はとても大切な役割を果たしてきました。

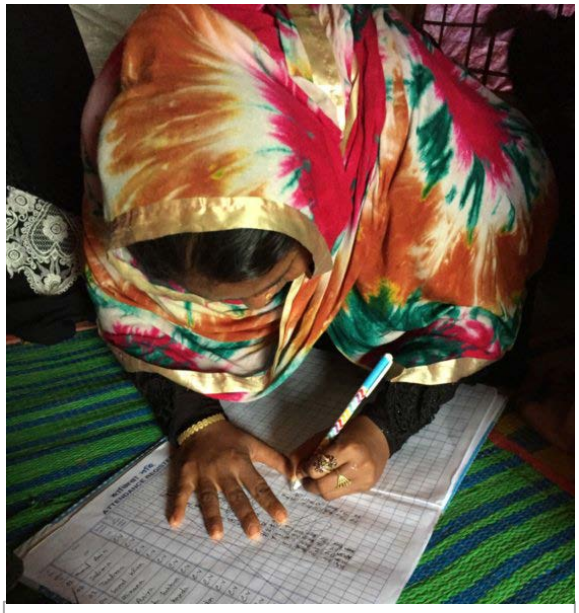
今年 4 月からはクリニック周辺のキャンプで地域保健活動を開始しました。地域保健活動はクリニックでの診療支援とは違い、実際にキャンプに居住するボランティアにトレーニングをし、彼らがキャンプを歩き回って住民を対象に健康教育を行います。正しい生活習慣を知ることで病気が予防できたり、簡単な応急手当ができれば、自分たちで健康を守ることができます。また、危険な症状をいち早く発見することで、重症化する前に病院に連れていくことができます。私の役割は、地域保健活動の枠組みを作り、活動を軌道にのせることでした。そのために、バングラデシュ赤新月社のスタッフやボランティアと協力し、2 か月間活動を行いました。

バングラデシュ赤新月社スタッフと打ち合わせ

まずはどういった健康教育が必要なのか、、、その内容を考えることから始まります。そのためにはキャンプに住んでいる避難民の方々の居住環境や健康状態、生活習慣、気候など、様々なことを検討する必要があります。キャンプに住むほとんどの方は竹とビニールシートでできたテントに住んでいます。共同トイレは壊れていることも多く、下水道はほとんど整備されていません。雨が降ればすぐに泥だらけになりゴミが溢れ、土砂崩れで家や井戸が壊れることもあります。食事はほぼ配給のみ、栄養状態も良いとは言えません。こういったことから、バングラデシュ赤新月社は地域保健活動の焦点を「水と衛生・感染症」「栄養」「ファーストエイド（応急手当）」「こころのケア」「家族計画・お母さんと子供

の健康」に絞りました。そして、日赤もこれに準じた活動を進めています。

活動の主役となるのは約 30 名の地域ボランティアです。彼らの半数以上が教育を受けたことがなく、読み書きができません。特に女性ボランティアの多くは名前すら書いたことがなく、出席簿にサインすることができません。そのため、バングラデシュ赤新月社のスタッフがアルファベットで名前の見本を書き、それを何度も練習し、2 か月でやっとサインが書けるようになりました。正直なところ、サインもかけないボランティアにとって教育活動はとても難しいと考えていました。実際に活動開始当初、家庭訪問に行っても女性ボランティアはほとんど話すことなく、後ろで見ているばかりでした。そのため、女性ボランティアにも話す機会を持てるよう配慮すること、話す内容や進め方を具体的に話し合い、事前準備を十分行うよう伝えました。個人差はありますが女性も徐々に自信を持ち、人前で話せるようになっていきました。宗教、文化的な背景から、女性が 1 人で屋外に出ること、他人の家を訪問することを好ましく思わない避難民も多く、地域保健活動をどのように進めていくか、まだまだ今後もチェレンジは続きます。



出席簿にサインをするボランティア

スタッフとボランティアのミーティング

地域保健活動の一つとしてハザードマッピングを行いました。これは自分が住んでいる場所にどのような危険が潜んでいるのかを住民が理解し、予防的行動や災害発生時の対応につなげることを目的としています。第一回目はまずボランティア対象に実施しました。最初に地域の地図を模造紙に描きますが、彼らには地図を描くという習慣がなく、何から描けばいいのかわかりません。ボランティア全員で周辺を歩いて回り、その記憶をもとに地図を描きました。その後、どのようなリスクがあるのかを考えます。雨が降れば氾濫しそうな川、壊れそうな橋、土砂崩れのリスクの高い場所、ごみのたまり場など一つ一つ地図に印をつけていきます。「トイレの周りの状況は？」と聞くと「汚い！」「危険」と口を

ハザードマップを作成中

揃えて答えます。ボランティアからは「いろいろな危険があることを知った。」「これからは周りの環境を注意してみていきたい」などの意見がきかれました。また、「初めて地図を描いたのできれいに書き直したいから紙がほしい」との要望がありました。タイトなスケジュールの中実施しましたが、ボランティアの活き活きした表情をみて、実施してよかったと感じました。今後はすべての活動地域でマッピングを行っていく予定にしています。

今回の私のもう一つの役割は、調査を行うことでした。事業を始めるにあたって、避難民の行動様式や知識を理解し、事業によってそれがどう変化したのかを長期的に評価していく必要があります。入念に考えた結果、質問は約 80 項目。これだけの質問数であれば本来ならＡ４用紙 10 枚程度になりますが､今回は国際赤十字の調査専門家のサポートを受けて、KOBO というソフトを利用し、スマートフォンを使って調査を行いました。9 名のバングラデシュ赤新月社スタッフにトレーニングを行い、8 月半ばに 4 日間かけて 384 世帯の調査を終了しました。

スマホを使ってキャンプ住民に調査を実施

質問の中には「安全だと感じるか」「なんでも話せる人が周囲にいるか」など心のケアに関連した項目もあります。それまで気丈に答えていた男性が急に涙を流し､「息子二人はミャンマーの留置所に入れられている。他の家族とも離れて暮らしている。」と、これまでの辛い経験を話されることもありました。

私は毎日調査に同行していましたが、こういった質問を通して、避難民の方々の抱える精神的背景の複雑

さを改めて感じました。キャンプにはいろいろな経験をした避難民の方々が住んでいます。家族、親戚全員でバングラデシュに辿り着き、同じキャンプで生活するもの、離散してしまい誰も知り合いのいない家族、孤児、など様々です。これまでどのようなことがあったのか、一人一人詳しく知ることはできませんが、これまでの大変な経験は大人だけでなく、上手く言葉にできない子供たちの心にも深く影響を与えているのでないかと考えます。

この先、避難民の方々の生活はどうなっていくのだろう、、、何度も考えましたが、もちろん答えはわかりません。ただ、母国を離れ、何日もかけてバングラデシュに辿り着き、テントをたて、地域をつくり、一日一日を一生懸命過ごす様子を見て、生きるエネルギーを強く感じました。彼らの人権が尊重され、少しでも生活環境が改善されるよう、赤十字・赤新月社の活動にさらなるご理解・ご支援をお願いいたします。

※国際赤十字では、政治的・民族的背景及び避難されている方々の多様性を配慮し、「ロヒンギャ」という表現を使用ないこととしています。